

むし暑い晩だった。いつもなら、発電所や海軍基地のある湾から、西の風がふくののに、今夜は、あけはなした窓へのカーテンはそよとも動く気配がない。

彼女はシャワーを浴びたあとの素肌に絹のローブを羽織って、ドレッサーの前に腰かけた。

ローブは彼女が秘書をつとめる市長からのプレゼントだった。青地に、薄い白のストライプが入っている。市長は、彼女の家を訪れるたびに、何かしらプレゼントを持ってくるのだ。

——あたしにくれるものの半分でいいから、奥さんにあげたら？

そういつて彼女は市長をからかったことがある。でつぷりと太った市長には、痩せぎすでヒステリー性の妻がいる。オフィスにたまに現われると、猜疑心さいぎしんのこもったいやらしい目つきで、彼女のことをじつと見つめるのだ。

(そうよ、あなたの思っているとおりよ、ミセス・市長)

彼女は鏡に向かっていった。

四人も子供を生み、それを育てることに全身全霊を使い果したあんだと、ひとりも子供を生まず、あんだより十以上も若いあたしと、市長がどっちの上のの、つかりたがるかは、一目瞭然じゃ

ない。

ゆるく前を結んだローブからは、はりを失っていない胸のふくらみと、うつすらと血管を浮かびあがらせた白い肌がのぞいている。

(太ももだって、ほら、あなたのように肉がだらしなくたれさがってやしないわ。そのために毎週、ヨガに通っているんですもの)

彼女は鏡に、わざと膝を開いてみせた。ハイヒールの似合う細くしまった足首、ごつごつとしていない膝、そしてその奥の、市長以外の男たちも魅了してやまない、食欲で歓びに満ちた泉。

(水道局長も、海軍基地の若い少佐も、わたしのこのあんよには首つたけよ)
彼女はほっと息を吐いた。ようやく熱いシャワーがもたらした汗がひこうとしていた。

この町に帰ってきてよかった——彼女は寝る前には決して欠かさないパックにとりかかりながら思った。

この町を出ていったのは十八のとき、もう二十年近く前だ。北部の大都会で、映画女優になるのが夢だった。

ウェイトレスをやりながら俳優養成所に通い、二十はたちで小さな役を貰うことができた。

「警察よ！」

たったひとことのセリフで、彼女は銀幕にデビューを果たした。二流のアクション映画で、スタッフの半数以上がイタリア人だった。

「警察よ！」

シーナンバー29の、その場面を、彼女は決して忘れることはないだろう。二年前、なにげなくつけたテレビのレイトショウでその映画をやっていたとき、彼女は全身が震えるほどの興奮を感じたものだ。

あのときは確か、水道局長が泊まりに来ていた。

——もうすぐよ、もうすぐわたしが出るわ

凶悪犯がたてこもったスラム街のアパート、シヨットガンの銃口が窓からつきだされている。とり囲む群集、そしてサイレンを鳴らしながらつつこんでくるパトカー。

「警察よ！」

群集の中の彼女が叫ぶ。そのセリフが終わらぬうちに、シヨットガンが火を噴く。先頭のパトカーのフロントグラスが粉々に砕けちる。

助手席に乗っている、クールなタフガイが主人公だ。食べかけのハンバーガーを口にくわえたまま、フロントグラスの内側からマグナムを撃ち返す。

——え、どれ？ わからなかったよ

ひどい近眼の水道局長が眼鏡をもちあげて画面をのぞいたときには、シーンは終わっていた。

彼女は答えず、パトカーの運転席にすわる、若い制服警官を見つめていた。

イタリヤ系の彼は、監督のおいで、準主役のこれが、やはりスクリーンデビューだった。ラスト近く、血染めの制服姿で、主人公の腕の中、息絶える。

克蘭クアップ後、彼女はその男と暮らし始めた。

わかったのは、酒とドラッグが大好きな、ひどい女蕩おんなたらしだったということ。警官どころか、犯人役が似合いの、典型的なよた者だった。

暴力行為と麻薬所持で、二度逮捕され、二度とも彼女が保釈金を工面した。なのに、そいつがしてくれたのは、殴ることと、兄貴分のイタリヤ男を押しつけることだけ。

別れるといつたとき、二度と映画の仕事をできなくしてやる、とおどされた。

けっこう、もう未練はないわ。

女優から足を洗い、小さなマネキン事務所に入った。スーパーで洗剤を売るのが仕事のすべてだ。しつこい店長につけ回され、やむなくつきあったこともある。もともと、おかげでその月の彼女のセールスは断トツにあがり、所長からボーナスが出たが。

実ることのない、いくつかの恋のあと、町に帰る決心をした。大都会にいても、チャンスはめぐってこないと思われられた。

町に帰ってみてわかったこと。

自分の体にしみついた、大都会のけばけばしい、しかしどこかうすよごれた匂いが、男たちをひきつける。

両親は、もうとうに死んでいた。小さなアパートを借り、勤め口を捜した。職業斡旋所の年老的係員が、まず彼女に甘いチャンスを与えた。

——市役所が秘書業務をこなせる女性を募集しているが、経験は？

彼女はにっこり笑ってみせた。北部のスーパーマーケットの数だけ、笑顔には自信がある。

——もちろんよ

——よかった。あたしの方から推薦をしておこう。ところで、この街には長いこといなかったようだが、おいしいピザハウスが今どこなのか知っているかね？

——いいえ

——よかつたら案内してあげよう

そして今、小さな家を借り、悠々自適の暮らし。市の秘書課でも、一番重要なポストに、彼女はついている。発電所や軍基地との、市としての連絡を保つ係りだ。

そのポストについては二年前だった。市長と寝た半年後だ。ポストは、地位だけでなく、収入もまた増やしてくれた。

北部の大きな組織、通称コーポレーションが、彼女にアルバイトをしないか、ともちかけてきたのだ。アルバイトの内容は、情報を売ることだった。

情報といつてもたいしたものではない。海軍基地でもよおされたパーティに市の誰が出席し、誰が出席しなかったか、とか、発電所の定期点検に誰が立ちあい、そのとき本社から来たトラックに「発電所反対」のプラカードを持って立ちふさがろうとした者がいなかったか、とか、そんな内容だ。

小さな町の小さな出来ごとに過ぎない。毎月、シュレッダーにかける書類のいく枚かをコピーして郵送すればすむことだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。